

櫻

星野史子

今年の東京の櫻の蕾はいまだ固かりしかど、花屋より届けられたる櫻は今にも咲き出ださんとする様なり。今回の花材は彼岸櫻とアイリス三本、ナルコ二本なり。眞華の花態を意識して活くやう方針定めらる。眞華とは佛にたむくる心を持ちて活くるものなり。この世に現ずる要素、地水火風空の五大と識大を合わせ六大と認識する密教の考へ方によるものにて、花を活くる人間（自分自身）も花も、姿や形の現れ方は異なれど、等しく宇宙の現れなりとの理解を前提するものなり。そこにあるいのちは調和し、不思議なる均衡を保ちて生かさるるものなり。弘法大師の「即身成佛偈」には「六大無碍にして常に瑜伽なり、四種の曼荼は各々離れず 三密を加持すれば速疾に顯はる 重重帝網なるを即身と名づく」とある。眞華とは全てが生かさされてゐることを花によりて顯示する「眞理の華」なり。花を持つ手は宇宙のいのちに觸ることなり。眞華には九つの役枝「体」「相」「用」「見越し」「受」「控」「前置」「胴」「正眞」ありて、それぞれの役割を果す。一番長き枝を「体」と選び、両手もて握り段々に力を入れて矯め行くなり。彼岸櫻の枝は細く折れやすし。次に「相」の枝、「用」の枝と長さを決めて活くるなり。アイリスはまだ蕾なれど莖と葉は眞直ぐに伸び誠に清々しき姿なり。三本の内一本のアイリスを「正眞」となし、「体」の役枝の半分ほどの長さに切りて劍山留めにさす。華道教本には正眞の役枝は「眞を示して揺るぎなき無染無着の佛性を現し眞っ直ぐに活くるなり。その花の佛性と活くる（行爲をなす）自らの佛性と佛の本性とは等しと感じて活くる役枝なり」と説明あり。

數年前、圖らずも春爛漫の東寺に參拝の縁を得たり。廣大なる境内に數多の櫻ある中に、樹高十三メートルになりなんとする枝垂れ櫻あり。澄み切りたる空に浮かぶ五重塔を背景に優美に佇む櫻は、弘法大師の「不二の教え」にちなみて命名されし「不二櫻」なり。聖なる「佛」と凡夫たる「人」とは別のものに非ずとの意味なりや。そが満開の多くの花を伴ひて垂るる枝は誠に神秘的なり。その「氣」を思ひ切り吸ひて後、講堂へ向ひて秘密の佛教の世界への扉をあけたり。まづ最初に四天王のうち東の守護神なる持國天、その傍らの梵天様に出會ひけり。奥に大きく立體曼荼羅の世界廣ぐる須弥壇には、大日如來を中心に五智如來、その東に金剛波羅蜜菩薩中心の五大菩薩、西に五大明王集ひけり。明王部の中心に座したる不動明王の尊顔を拝するや、我直ちに己が心見透かされたりとの恐れ感じて足竦み、立ち止まること暫しなりき。「お前の日々に嘘は無きや、障るもの何かありや」と問はれたる心地ぞせられたる。

今日この活けたる櫻の花と向き合ひて、我自らが花に和したれば、その瞬間心鎮り、氣持ち伸びやかにして解き放たれたる心地になり得たり。